



目次

巻頭言・・・・・・・・・・p.2

研究室紹介

- 人間探求領域 坂田省吾先生・・・・p.6
- 有賀敦紀先生・・・・p.11
- 社会探求領域 片柳真理先生・・・・p.15
- 横藤田誠先生・・・・p.18
- 自然探求領域 向谷博明先生・・・・p.21
- ヴィレヌーヴ・真澄美先生・・・・p.26

輝いている人・・・・・・・・p.30

OB・OG紹介

- OB紹介・・・・・・・・p.33
- OG紹介・・・・・・・・p.36

特集

- 総科サークル特集・・・・・・・・p.41
- 特集 酒蔵通り・・・・・・・・p.43

review×review・・・・・・・・p.46

飛翔な日々・・・・・・・・p.49

編集後記・・・・・・・・p.52



巻頭言

岩永 誠

(総合科学部長・総合科学研究科長)



不思議の世界「こころ」

みなさんは、漫画『ゲゲゲの鬼太郎』のご存知だろう。その原作者の水木しげる氏が

昨年亡くなった。1922年の生まれで、太平洋戦争中に左手を失いながらも、復員後紙芝居作家となり、1958年に漫画家としてデビューする。1960年から、『ゲゲゲの鬼太郎』の前身となる『墓場鬼太郎』を執筆する。鬼太郎が流行した1960年代には、『妖怪百物語』や『妖怪大戦争』といった妖怪映画や、怪猫シリーズの映画がたくさん作られ、ゴジラの怪獣ブームと競う妖怪ブームが起きていた。こうしたブームは江戸時代にもあり、葛飾北斎や喜多川歌麿呂、歌川国芳、月岡芳年といった絵師達が、多くの幽霊や妖怪の絵を残している。広島県三次市には『稲生物怪録絵巻』が残されており、稲生平太郎(16歳)と毎夜訪れる化け物の様子が描かれている。江戸時代には妖怪カルタも売られ、一般庶民も妖怪を楽しんでいた。歌舞伎でも怪談物が演じられ『彩入御伽草(いろえいりおとぎぞうし)』『累淵扱其後(かさねがふちさてもそののち)』『東海道四谷怪談』

などが有名である(ちなみに、東海道には四谷宿はないので、名称からして創作であることがわかる)。落語においても、『怪談牡丹灯籠』

『真景累ヶ淵』『お菊の皿』『一眼国』などの多くの作品がある。三代目桂米朝の得意とした『地獄八景亡者戯』は鯖に当たって死んだ喜六が地獄めぐりをして三途の川を渡るとか閻魔大王とのやり取りをして地獄に落とされるという話で、一時間を超える大作である。

『ゲゲゲの鬼太郎』にはたかさんの妖怪が出てくる。鬼太郎や目玉おやじ、ねずみ男、猫娘は、水木しげる氏の創作であるが、一反木綿やぬりかべ、砂かけ婆、子泣き爺といったキャラクターは実在する(?)妖怪である。一反木綿は、『大隈肝属郡方言集』(野村伝四・柳田國男著)によると、鹿児島県肝属郡高山町(現・肝付町)に伝わる妖怪で、約一反(長さ約10・6メートル、幅約0・3メートル)の木綿のようなのものが、夕方になるとヒラヒラと飛んできて、人を襲うとされている。首に巻きついたり顔を覆ったりして窒息死させるとも言われている。ぬりかべは福岡県遠賀郡の沿岸部に伝えられる妖怪で、夜道で人を歩けなくさせる姿の見えない壁のような妖怪である。横を通り抜けようとしても壁がどこまでも続いていて、通り

抜けることはできない。柳田國男が『民間伝承』の『妖怪彙』に発表してから、知られるようになった。砂かけ婆は奈良県や兵庫県の妖怪で、『妖怪談義』（柳田國男著）の中で紹介されている。人が神社のそばや人通りの少ないところを歩いていると、砂を振りかけて脅す妖怪である。砂をかける音が聞こえてきたものの、実際に砂がかげられることはないとか、夜鳥居の下をくぐると砂をかけられると言ひ伝えられているが、その姿を見たものはいない。『ゲゲゲの鬼太郎』で描かれ、それが具体的なイメージとなっている。子泣き爺は徳島県山間部にいる妖怪で、本来老人の姿をしているが、夜道で赤ん坊のような声で泣くという。泣いている子泣き爺を通行人が抱きかかえると、次第に体重が重くなり、手放そうとしてもしがみついて離れず、しまいには人の命を奪ってしまうとされている。また、石のように重くなって、押しつぶすともされている。武田明が『民間伝承』に掲載された『山村名彙』で報告しているが、実際には子泣き爺伝説は徳島県には存在しないという説もある。こうした妖怪には、日本中で類

似した妖怪が報告されている。ぬりかべは高知県では「野襖」、鹿児島県奄美地方では木が枝を広げて道を塞ぐ「シマブー」が存在する。砂かけ婆は青森県や新潟県では「砂撒き狸」と言つて、狸が砂を撒きかけてくるという。子泣き爺は青森県津軽地方では「子泣き婆」となる。このように、地域が異なっても類似した妖怪が存在するところが面白い。その典型的なものが河童である。江戸時代には捕獲された河童の絵が残されている。頭にお皿があつて、背中に甲羅があり、水かきのついた手足という典型的な河童の絵が残されているほか、大分や新潟では4足歩行の河童の絵が残されている。河童は身長約60センチと小さく、生臭い匂いがすると記録されている。河童伝説が有名なのは、岩手県遠野の河童淵である。柳田國男の『遠野物語』や『遠野物語拾遺』に河童の記録が残されている。遠野物語は、岩手県遠野地方出身の佐々木喜善の語った逸話をまとめたもので、河童の他にも天狗や座敷童子、オシラサマといった妖怪も登場する。

河童は、日本全国で百種類以上の呼び名があ

ることがわかっている。青森地方では「メドチ」や「水虎様（しっこさま）」、能登では「ミズシ」、石川では「カワソ」、鳥取や島根では「カワコ」、高知県では「芝天（しばてん）」、佐賀県有明地方では「兵主部（ひょうすべ）」、宮崎では「ヒヨースポ」と呼ばれている。広島・山口・愛媛では「猿猴」「エンコ」と呼び、女に化けて男をたぶらかすとされている。いわゆる河童は関東地方の方言で、河の童・川の童子を意味する言葉から「カワツパ」「カワツコ」から派生した言葉である。こうした多くの呼び名があるものの、いわゆる「河童」には共通する特徴がある。それは、「駒引き」と呼ばれるもので、農作業が終わって河原で休んでいた牛や馬を川の中に引きずり込んでしまう。また、川で泳いでいる人を水中に引きずり込み、尻から手を入れて尻子玉を抜くということや、人にいたずらをするのが挙げられる。他にも、畑のキュウリをとって食べ、それが見つかると詫びてお礼を持ってくるとか、指を落とした河童に指を届けてやると秘薬の作り方を教えてくれる、相撲を取る、といった伝承もある。駒引きや尻子玉

巻頭言

を抜くというのは、江戸時代の人にとって理解しがたい不思議な現象であったに違いない。今まで草を食んでいた牛や馬がなせ川に流されてしまうのか、泳ぎが達者であった人が川で溺れて亡くなってしまうのが理解できないし、しかも肛門が開ききっていることに異様さを感じたのだろう。こうした理解を超えたこと、納得できないことをなんとか説明するために作り出されたのが「河童」だったのである。そのため、呼び名は違っているけれども、その悪さの内容はかなり似通っているのである。現代では、溺れた理由も明らかにすることができるので、河童を想定する必要はない。

昔の人にとって説明のつかいないことを合理的に説明しようとして河童を創り出した「脳やこころ」の働きは不思議であり、しかも地域が異なっているにもかかわらず同じようなものが創り出されたことから共通する思考様式が存在するものと考えられる。自分が納得いかない時に、自分にとって合理的な理屈づけをするために都合よく創り出した存在が、妖怪ではないだろうか。日本中にたくさんの妖怪がいる。それを見

るたび、脳不思議さと人の想像力の豊かさを実感する。ちなみに、私は心理学を専攻しているのであって、妖怪博士ではない。残念ながら。